

近代日本の地域社会における 読書・書記文化の形成と展開

研究内容

近代日本の地域社会における活字メディアの展開、およびリテラシー（読み書き能力）の形成について明らかにすることを目的とした研究を進めている。主な分析対象は農村を中心に広く普及した雑誌『家の光』であり、当時の農村社会において活字メディアを通じて情報や言説がどのように流通・伝達し、さらに受容されたのかを具体的に明らかにし、活字文化が地域社会を含めて大衆化していく歴史的な段階を記述することを目的とした論究を行っている。また、地方における教科書の流通についてや、農村地域における日記行為についてなど、一貫して地域社会における読書・書記文化に関する問題に着眼して研究している。他には、国内外で複数の「資料調査」に参加し、各機関の蔵書整理および目録作成・データベース構築に携わり、それに基づいた考察を研究の成果として発表している。



如来寺（いわき市）での資料調査の様子

地域・産学連携の可能性

研究の一環として行っている「資料調査」は、地域社会に残された書籍や文書などを整理し、調査することで、資料の価値を明らかにするとともに、後世に受け継いでいくための体制整備に有効である。例えば、福島県いわき市「如来寺」という寺院での調査では、仏教関係の文献を中心に室町期から明治期に至るまでの典籍3,500冊を対象とし、①蔵出し・虫干し・掃除、②調査カードの作成、③目録データ(Excel)の入力、④蔵書票を貼る、という一連の作業を行った。この調査により、資料の歴史的な価値が裏付けられ、その一部は指定文化財として認定され、更に今後の保存・管理の体制も整うことになった。「資料調査」は、地域の財産である資料が後世に継承されていくための基盤を作ることに寄与し、学術的な研究の成果が社会に還元される可能性を持つ。



如来寺（いわき市）での資料調査の様子

このテーマに関連するSDGs開発目標



総合教育センター 日本近代文学、メディア、リテラシー史

河内 聡子 KAWACHI Satoko

講師、博士（文学）

執筆論文

「如来寺蔵『雑誌抜粋』に見る近代メディアの受容と利用 明治期における仏教知の再編をめぐる」
『リテラシー史研究』13号、2020年



Keyword

雑誌、メディア、リテラシー、地域社会、資料調査